

題字: 水六輔

「618名、全員着席しました。コンサート開始、よろしくお願いします」  
どんよりとした暑り空が小雨模様に変わった。5月のとある午後……。物音のしない講堂に、涼とした女性刑務官の声が響き渡った。

ここ岐阜県羽島郡にある笠松刑務所は、20代から80代までの650人を超える受刑者を収容する女子刑務所だ。

「コンサート中は奇声を発したり、許可なく立ち上がりなさい。たたかひとりの不届きな者のために、コンサート

“どうしてそんな場所で歌わなきやいけないの？”  
それから4年——場の中でのコンサートは150回を迎えた。受刑者からの“ありがとう”で気づいた、“心”をこめて歌うこと。だから、今日もふたりはステージに立つ……。

が中止にならないように！」

女性刑務官の言葉に促され、グレーの作業服姿でバイブルスに座った受刑者たちは、背筋を伸ばし、姿勢を正した。

そんな中、オーブニング曲『愛と欲望の日々』にのって女性デュオのPaix(以下、ベベと表記)がステージに飛び出した。白いジャケットにパンツスタイルが、井勝めぐみさん(30)。白いブラウスにスカート姿ながら、北尾真奈美さん(28)だ。

「みなさん、こんにちは！」

「…………」

ところが、会場は静まり返ったまま、受刑者からの反応はない。実は、刑務所内では私語が禁止されているため、コンサート中、入所者に許されているのは拍手のみ。違反者は懲罰が与えられてしまうのだ。

だが、4年前から始めた刑務所でのコンサートも、この日でちょうど150回目を迎えるふたりにとって、そこは慣れたもの。真奈美さんが、「今日は、特別に先生(刑務官)からお許しをもらつていいので、元気にしてください。それでは、あらためて……こんにちは！」

そう叫ぶと、

「みなさん、こんにちは！」

「…………」

今度は熱氣があふれる受刑者たちの声が講堂に轟いた。ふたりがこの笠松刑務所を訪れるのは3年ぶり2度目のこと。「私たちのコンサート、初めての人ほどくらいいますか？」

「じゃあ、2度目という人は？」

クスクス笑い声が漏れると、

「涙を拭いて元気だせよ笑ってごらん元気だせよ明日があるからみなさんと一緒に、右腕

を伸ばして元気よく！」

「ただ前の席に嫌いな人がいるふたりをのぞくと、そこはいつもどさくさに紛れて殴つちゃダメですよ。連れて行かれちゃいますよ(笑い)」

そのううふたりの掛け合いに場内は大爆笑。張り詰めていた空気がウツのように和やかな雰囲気に包まれていった

——と、ここまでがいわゆる懶みはOKだ。クイズコーナーなどを挟んで次第に曲調もアップテンポになっていき、オリジナル曲『元気出せよ』が始まつた。

『恩間』コンサートの定番な歌を挟んで、彼女たちのコンサートは、ここからが本番。

それは……コンサート終盤に紹介されるさまざまな受刑者の家族からの手紙だ。

この日、紹介されたのは、罪を犯した父親への思いを綴った娘からの1通のメールだ

## “刑務所のアイドル”

女性デュオ「Paix<sup>2</sup>(ベベ)」  
北尾真奈美さん<sup>28</sup>井勝めぐみさん<sup>30</sup>



# 自分たちの知ら 誰かに

# ないところで…… “心”が届いている!



を起こしそうになつたことも

あつたけど、最後には必ず、

このCDを聴いて頑張つて

いた。でも、

そんな思いで駆けられたいた。

12月の、雪が深々と降る肌寒

い朝——イベント直前の彼女

たちの楽屋を訪ねる5人の中

年男性の姿があつた。

「いちばん嫌だったのが夜の

スナック回りで、どうしてこ

んなわやかな歌を盛り場で

歌わなくちやいけないんだ、

こんな経験がいつたい何にな

るんだ……って落ち込んでば

かりいましたね」(めぐみさ

ん)

しかし、片山さんは愚痴を

いうふたりを前にこうい放

つた。「ここにいる人たちの心をつ

かめないで、ステージからお

客さんの心をつかめるわけが

ないだろ。嫌だったら、荷物

をまとめて、鳥取へ帰れ！」

どんなに頑張っても、歌手

扱いさえしてもらえない毎日。

「もう、やめたい……。やめ

ます」(めぐみさん)

ファイナーレでは受刑者から花束と、惜しみない拍手が送られていた……

た。出演したのは、夜8時からの生放送「歌謡コンサート」。観覧者が聞くと、まばゆいばかりのスポットライトがふたりを見らした。

「やつと、ここまで来ただ

ね、私たち……」「……うん。私の隣には、必ずあなたがいてくれた。だから、やつてこれなんだよ」

どちらからともなく視線を合わせるふたり。舞台裏から

ふたりを見つめる片山さんは、こんなにたくさんの人の瞳にも、光るものがあった。

「デビューから6年——。自分に自信がもてなくて、何度も自分を見捨てそうになつたことだらうか。けれど、どんなにつらいときでも励まし、見守ってくれたのが、家族の愛情であり、片山さんのサポートだつた。

片山さんは、娘の身体を気遣いながら夢はいつか必ず叶うといふ。そんな強い意志を学んだ。真奈美さんの母・恵美子さんは、娘の身体を気遣いサポートだつた。

「めぐみさんからは、思ひ続けられれば夢はいつか必ず叶うといふ。そんな反対はしてしません。ふたりは行くところまで行きなさい、いまははつきりといふたりはこういう。

両親への意地もあり、ふたりはたつたひと言の「ありがとうございます」がいえず、月日が流れました。そして大反対だっためぐみさん、みさんの母・恵美子さんは、娘の身体を気遣いサポートだつた。

高齢の入院患者の死に幾度も立ち会つてきた。大勢の家族を見守られて息を引き取る人もいれば、ひとり寂しく旅立ついく人もいる。人にやさしく、人のため

の生きた人は、その死がたくさんの人には惜しまれる……。

本人にどつては、何か幸せなのかわからないけど、人の生きさまは死にさまなんだな

とあります」(めぐみさん)

放送が始まって、しばらくたちは、九州でのコンサートを終えた帰り道——。高速道路

のバークリングエリアで、休憩しているふたりの前を、歌を口ずさみながら女の子が通り過ぎた。

「SAYいっぱいを／わかつてくれて、ありがとう」(めぐみさん)

「あれって、もしかしたら私たちの歌……だよね？」

「うん、たぶん……」

## 「お互いに何かを考える場所になればいい」

● ● ●

「……で鳥取に帰りたい……」  
「……お願いします……」  
「……もちろん、お客様は……」  
「……お車で、どうしてこられるんだ……」  
「……歌を盛り場で歌わなくちゃいけないんだ、こんな経験がいつたい何になるんだ……」  
「……落ち込んでばかりいましたね」(めぐみさん)

「……歌を盛り場で歌わなくちゃいけないんだ、こんな経験がいつたい何になるんだ……」  
「……落ち込んでばかりいましたね」(めぐみさん)

「……歌を盛り場で歌わなくちゃいけないんだ、こんな経験がいつたい何になるんだ……」  
「……落ち込んでばかりいましたね」(めぐみさん)

「……歌を盛り場で歌わなくちゃいけないんだ、こんな経験がいつたい何になるんだ……」  
「……落ち込んでばかりいましたね」(めぐみさん)

「……歌を盛り場で歌わなくちゃいけないんだ、こんな経験がいつたい何になるんだ……」  
「……落ち込んでばかりいましたね」(めぐみさん)

北海道から九州まで、日本全国のカリスマホストたちが集結!  
グランドチャンピオン決戦リターンズ!

## エントリー BOYS 大募集中!

自薦・他薦は問いません!  
喜ってご参加ください!

7月13日(土)エントリー大発表  
同時に投票開始!

詳細はYukaiLife本誌、または下記サイトにて!  
ケータイ» http://www.yukai-life.co.jp/m/  
PC» http://www.yukai-life.co.jp

問い合わせ/全日本ホストグランプリ事務局  
mail: h-1gp@yukai-life.co.jp

QRコード

\*ID登録済の方はご利用できません